The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪市立東洋陶磁美術館所蔵《青花楼閣山水文角瓶》について
Author(s)	宮﨑, 慎一郎
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 33-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪市立東洋陶磁美術館所蔵《青花楼閣山水文角瓶》について

日本東洋美術史　博士前期課程 2 年
宮﨑　慎一郎

はじめに

本発表は、朝鮮時代後期（18 世紀後半～19 世紀）の代表的な青花の一つ、大阪市立東洋陶磁美術館の青花楼閣山水文角瓶（以下、本作）を対象として、その文様の図様および主題を検討し、故事人物画との関係からその製作背景を考察するものである。

青花とは、青く発色するコバルト顔料で文様を描いた白磁のことで、朝鮮時代では王室の器を専門に焼く京畿道広州の官窯で主に生産された。18 世紀後半になると、その需要層は広がり、器種や文様が多様化し、文人趣味を帯びていく中で、本作のような青花が登場した。

第 1 章　概要と先行研究

（1）概要

本作は、板状にした土を張り合わせて成形する四角瓶と呼ばれる形状で、製作時期は 18 世紀後半とされる。幅の狭い両側面に梅竹文、長方形の広い面には二重の枠線の中に山水人物文が表される。一つの面には、菊の花をもち松に腰かけた人物と、その人物のもとに駆け寄る童子が描かれ（以下、第 1 面）、反対の面には、東屋から池に浮かぶ蓮を眺め、襟元を大きくはだけて団扇をあおぎ涼む人物が描かれる（以下、第 2 面）。

（2）先行研究

先行研究では、本作が絵画と密接な関係にあることが指摘されてきた。まず文様の図様について、朴仙卿氏が、青花花鳥山水文壺（龍仁大学校）や本作の遠山表現において画譜との類似を指摘し、絵付けにおいて画譜が参照されている可能性を示した[1]。また劉美那氏は、18 世紀前半の画員（宮廷画家）が制作した書画帖に収録されている韓後邦「東籬採菊図」『万古奇観帖』（個人蔵）や韓後良「黄香扇沈図」『芸苑合珍書画冊』（大和文華館）と類似した図像が、本作にも見られることを指摘した[2]。また「黄香扇沈図」と本作の第 2 面が、『五言唐詩画譜』「静夜相思」と類似していることから、図画署（宮廷の画事を担う部署）で採用された図像が、18 世紀後半にいたるまで多様に用いられていたことを明らかにした。

文様の主題については、方炳善氏が、第 1 面を東晋の詩人、陶淵明の「飲酒」の一節に由来する「東籬採菊図」、第 2 面を蓮池の畔に立つ東屋で暑さをしのぐ人物を描いた「荷亭納

---

[1] 朴仙卿「国宝第 263 号白磁青画山水花鳥紋大壺ついての研究（Ⅰ）」『丹豪文化研究』第 2 号、龍仁大学校伝統文化研究所、1997 年（韓文）
[2] 劉美那「中国詩文を主題とした朝鮮後期書画合璧帖研究」東国大学校大学院博士論文、2005 年、152-160 頁（韓文）

涼図」と解釈した[3]。一方、鄭恩主氏は、性理学的な秩序の高まりから、隠遁生活を送った中国の高士が士大夫たちの理想型として崇められ、絵画や文学において盛んに表現されたことに注目し、第 1 面は陶淵明の「帰去来辞」の一節を表し、第 2 面には「愛蓮説」で知られる北宋の儒学者、周茂叔が描かれていると述べ、異なる解釈を提示している[4]。

先行研究を整理すると、本作に描かれた細緻な文様は、当時流通していた画譜や同時代に制作された書画帖の表現と類似しており、「絵画的」性質を帯びていることが窺える。しかし、主題の解釈には大きく二つの見解がみられ、再考の余地がある。そこで絵画との詳細な比較を再度おこない、図様の典拠と製作意図を明らかにし、主題の解釈を試みたい。

第 2 章　文様の図様と主題

（1）第 1 面

第 1 面は、松に腰掛けた黒い頭巾の人物や、童子の足の形や髪型、地面に咲く菊の位置など、確かに韓後邦「東籬採菊図」『万古奇観帖』との類似が認められる。しかし、小屋を描く点や画面両側に籬を配す点はむしろ『七言唐詩画譜』「菊花」との類似を指摘することができ、構図は「菊花」の図を左右反転させたものに近く、松の形状も弓形に曲がった幹や枝の伸び方などがよく似ている。また、頂上が鋭く、輪郭が折れ線状にとられた遠山や、細い幹に下向きの竹葉を緻密に描く竹の表現も『唐詩画譜』に類例を見出すことができる。

次に主題を考えると、菊を採る人物や籬が描かれていることから、陶淵明の「飲酒」其の五「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」の句がまず挙げられる。「東籬採菊」は陶淵明の愛菊の故事を描く人気の高い画題で、18 世紀に活躍した文人画家、鄭敾も複数の作品を残している。しかし、第 1 面には「東籬採菊」だけでなく、鄭恩主氏が指摘した「帰去来辞」「三径荒に就いて、松菊猶ほ存す」の句も意識されていると思われる。この一節は、陶淵明が官職を辞して故郷に戻り、「庭の小道は荒れかけているが、松や菊は昔のままだ」と我が家を懐かむ場面であるが、第 1 面には松と菊に加えて小さな家が描かれており、その情景が示されている。さらに注目されるのは、その家の後ろに「菊花」の図にはなかった竹が加えられている点である。「帰去来辞」中の「三径」という語は、隠者の門庭を指し、漢の蒋詡が庭に三つの小路を作り、それぞれに松、菊、竹を植えたという故事に由来する[5]。第 1 面における竹の追加は、この「三径」の意味を踏まえた改変と考えられ、「帰去来辞」の同場面を絵画化した、鄭敾「松菊猶存」『帰去来図帖』（三星文化財団）を見ても、やはり陶淵明の庭には松、菊とともに竹が描かれている。

したがって、第 1 面は、「飲酒」と「帰去来辞」を踏まえ、菊を愛したことで知られる陶淵明を描いた「陶淵明愛菊図」と解釈される。

---

[3] 方炳善『朝鮮後期白磁研究』一志社、2000 年、319-320 頁（韓文）
[4] 鄭恩主「朝鮮後期青画白磁山水文様の展開様相」『古文化』80、韓国大学博物館協会、2007 年（韓文）
[5] 諸橋轍次『大漢和辞典』1 巻（修訂第二版）、大修館書店、1989 年、126 頁

（2）第 2 面

第 2 面も第 1 面と同様、画譜と非常に近い図様を示している。『五言唐詩画譜』「静夜相思」を左右反転させた構図をとり、遠山や東屋、水面の描き方なども共通している。一方で、楕円形の葉の上に花が咲き、その両側に外を向いた葉が配される蓮の形状は、韓後邦「黄香扇沈図」『芸苑合珍書画冊』と類似し、葉脈を細かく描き、葉の大きさを大中小描き分けるなど、他の青花に表された蓮花文よりも絵画に近い表現がみられる。

次に主題を考えると、第 2 面には、「静夜相思」の図や「黄香扇沈図」に描かれていた、それぞれの主題を示す重要なモチーフがなく、それらの詩や故事の内容は表されていない。一方で、大きく描かれた蓮の花が文様の中で存在感を放っており、鄭恩主氏が提示した周茂叔「愛蓮説」との関連性が認められる。周茂叔は「愛蓮説」において陶淵明が菊を愛したことを踏まえながら、自身が蓮を愛する理由を説く。第 2 面は「陶淵明愛菊図」を描く第 1 面の裏面であることから、本作の文様構成は、「愛蓮説」に沿った「愛菊」と「愛蓮」の対比構造になっていることが想定される。また第 2 面の蓮は、「静夜相思」の図や「黄香扇沈図」とは異なり、複数ではなく一輪のみが描かれている。これは「一品清廉」と呼ばれる図案で、「愛蓮説」で説かれた蓮の特徴から心情の清廉さを意味する[6]。さらに同時代の故事人物画をみると、1762 年に制作された鄭敾「濂溪愛蓮」『七先生詩画帖』（三星文化財団）をはじめ、池のほとりで蓮を眺める周茂叔を描いた作例が確認され、第 2 面の図様は当時受容されていた周茂叔のイメージと一致していることが確認される。

したがって、第 2 面は、第 1 面「陶淵明愛菊図」の裏面として「愛蓮説」を踏まえ、蓮を愛したことで知られる周茂叔を描いた「周茂叔愛蓮図」と解釈される。

（3）絵画的表現

以上のように図様と主題を分析すると、本作には様々な絵画的表現が認められる。まず構図やモチーフは『唐詩画譜』の図を左右反転させたものと類似している。同時代の絵画制作において、手本とする図様を左右反転させて利用することはしばしば行われており[7]、本作にも同様の手法が用いられたと考えられる。また、人物や蓮など一部のモチーフには『万古奇観帖』や『芸苑合珍書画冊』と共通する表現がみられ、画員の画風が認められる。

文様構成では、第 2 面「周茂叔愛蓮図」が夏、第 1 面「陶淵明愛菊図」は秋を表しており、表と裏で異なる二つの季節が対比されている。絵画において、故事を四季と結びつける表現は中国の南宋頃から見られ、明代の「四季図」（彦根城博物館）には「周茂叔愛蓮図」と「陶淵明帰去来図」がそれぞれ夏と秋の情景として描かれている[8]。本作の文様は、このような絵画における伝統的な表現が反映されており、故事人物画の性格を有している。

---

[6] 野崎誠近『吉祥図案解題－支那風俗の研究』中国土産公司、1928 年（再版：宮崎法子［監修］ゆまに書房、2009 年）、565-566 頁

[7] キム・ヨンウク「朝鮮後期故事画研究」韓国学中央研究院韓国学大学院博士論文、2023 年、94 頁（韓文）

[8] 朴恩和「中国絵画の四時画題」『講座美術史』53 号、韓国美術史研究所、2019 年（韓文）；前掲註 7、59 頁

朝鮮時代初期には官窯の白磁の絵付けに画員が携わったという記録があるが[9]、本作は文様が細緻であるだけでなく、主題を再構成する中で様々な絵画的手法が用いられており、その絵付けに画員が関与した可能性は極めて高いといえる。

第 3 章　主題選択の背景

まず、本作のように特定の故事人物を表した青花の類例をさがすと、青花神仙図双耳角瓶（大阪市立東洋陶磁美術館）が挙げられる。この作品は本作と同じ扁平な四角瓶で、表と裏の文様主題はそれぞれ「陶淵明撫松図」と「林和靖放鶴図」と考えられる。「陶淵明撫松図」は、陶淵明の「帰去来辞」「孤松を撫でて盤桓す」の句を表したもの、「林和靖放鶴図」は、西湖の孤山に隠棲し、梅と鶴を愛したことで知られる北宋の詩人、林和靖の代表的な故事を表したもので、これらの主題も朝鮮時代後期の絵画に数多くの作例が確認される。つまり、同時代の故事人物画にみられる動向が、青花の文様主題にも反映されていたと理解できる。

故事人物画において、陶淵明の愛菊、周茂叔の愛蓮、林和靖の愛梅の故事を描いた画題は、賞花文化との密接な関連が指摘されており[10]、本作の製作背景を考える上で注目される。賞花とは花見のことで、朝鮮時代では季節の花を鑑賞しながら酒を飲み、詩をつくる集会が宮中や士大夫層の間で慣例的に開かれていた[11]。また、二つの青花に共通して表されている陶淵明は、菊の花を用いた酒や料理とともに、菊を鑑賞しながら詩作にふける重陽節の宴会において、その詩や故事が強く意識されていたという[12]。

四角瓶は野外用の酒入れとされ[13]、その装飾に酒を詠んだ詩文や宴の様子を描いた文様がしばしば施される。そのため、本作や青花神仙図双耳角瓶は、賞花の宴席で用いる酒器として製作された可能性が十分に考えられ、隠逸と風流を象徴する陶淵明、周茂叔、林和靖の故事は、そのような宴会の趣向に沿った文様主題であったといえる。

おわりに

本発表では、青花楼閣山水文角瓶の文様表現について、絵画作品との比較から図様と主題を再度検討し、故事人物画との密接な関係を明らかにした。また、故事人物の特質や角瓶の用途から、文様主題の選択に士大夫たちの隠逸に対する憧憬だけでなく、賞花や詩作を中心とする風流文化が関わっている可能性を指摘した。本作はその文様表現から製作過程を具体的に窺うことのできる重要な作例として位置づけられる。今後は、故事人物を描く青花の作例を収集し、本作の陶磁史的位置づけを試みるとともに、朝鮮時代の賞花文化について文献史料からその様相を詳細に把握し、本作の製作背景に関する考察を深めていきたい。

---

[9] 『新増東国輿地勝覧』巻 6、京畿 廣州牧 土産條
[10] 前掲註 7、58-59 頁
[11] 李鍾黙「朝鮮ソンビの花見と風情ある詩会」『韓国漢詩研究』20、韓国漢詩学会、2012 年（韓文）
[12] 前掲註 7、170-171 頁
[13] 浅川巧『朝鮮陶磁名考』朝鮮工芸刊行会、1931 年（再版：草風館、2004 年）、48 頁